



July 2004 No. 48

(本部事務局)(財)日本特産農作物種苗協会内 〒107-0052 港区赤坂 2-4-1
(つくば事務所) 農業情報学会内 JRTつくば事務所
〒305-0034 茨城県つくば市小野崎 143-3
TEL 029-856-8708 FAX 029-856-0024
<http://www.jrt.gr.jp>

昆明旅行記 - 第5回世界馬鈴薯大会に参加して -

(有)菊水堂 岩井 菊之(きくじ)

ここ数年で、本棚の中国関係の本は 30 冊を超えました。私の中国の先入観は、論語の国、三国志の国、孫悟空の国、そして、最近では、世界の工場と言われ、いろいろな本を読んできました。振り返ると、学生の頃は毛沢東語録に惹かれ、祖父が漢文で読んでくれた十八史略を思い出します。不思議な国、中国、今回訪れた昆明は、香港、台北を入れると 8 番目に訪れる都市です。最近、私は、中国は EU の国のように考えるようにしています。都市ごとに言葉が違い、文化も違うように映るからです。

さて、出発しましょう。

3月24日、息子の卒業式に出席してから飛行機に乗り込みました。調べた中で一番安く行く方法を選びました。成田から夜便で上海に着き、翌朝、国内線の上海空港から昆明に行く方法です。成田 - 昆明の往復の旅費が約 8 万円でした。ただお勧めできないのは、夜の上海空港が大変危険に感じたことです。喧騒たるタクシーなどの呼び込み、最終バスに乗る乗客の大声、30分以上待たされるバスの中、皆早く自宅に帰りたいようで、色めき立っていました。

バス、タクシーと乗り継ぎ、夜中の 1 時頃に上海のホテルに着きました。

3月25日朝、上海市内中心の人民広場近くで小籠包を食べ、午前便に乗り、夕方、昆明につきました。

昆明国際空港から 30 分ほどでホテルに着ける距離でしたが、道路工事や夕方のラッシュで、およそ 1 時間、窓を開け放したタクシーに乗りホテルに着きました。後で気が付いたのですが、タクシーにはクーラーがあるのですが、ききが悪いので、窓を開けていた方が涼しいのです。「いつも春」の都、昆明とのことでしたが、飛行機の疲れで、暑さが身にこたえました。

ホテルで、今回の旅行を共にした、馬鈴薯育種家の M 氏、大学教授の T 氏、研究者の H 氏、通訳の C 女史と合流しました。このメンバーと 30 日までご一緒させていただきました。この日は、ホテルの最上階で、雲南料理を地元産のワインを片手にしっかりいただきました。多分旅行中で、このレストランの支払いが一番高かったかと思います。

3月26日。開会式初日。

実は、3月25日が会議登録日でしたが、予想以上にタクシーに時間がかかり、夕方5時に間に合わず、翌日の登録としたため、中国的なちょっとした事件がありました。

会議場に着くと、もう受付は終わっていて担当者がいませんでした。まず、担当者が来るまで、中国茶をいただきながら、誰が担当者かわからない状況で、2冊の参加者名簿の中から名前を探し、全員の名前が見つかったところで受付が始まりました。

私は、現地払いにしていたので、まず、事務所で金額を提示され、その金額の請求書を持って支払窓口に行き、領収書を持って再度受付に行き、入管証明書やレセプションの案内状やパンフレットを受け取りました。中国で買い物をした人は、わかると思いますが、同じ手順です。

さて、不思議な出来事が一つ、私の登録料は、300ドル（本当は？350ドル）と通訳のC女史の登録料が70ドルと、他の日本人が払った金額より安かったのです。中国的と私には思えます。登録でいつの間にか1時間ほど費やしてしまいましたが、汗をかきかき楽しいやりとりでした。

私のこの日のメインイベントは、カルビーの伊藤さんの発表でした。英語も中国語もさっぱりわからないのですが、今回初めて日本人の発表ということで注目していました。初めてという点では、展示場の出展も、日本からカルビー、麒麟の2社が出展しました。まだまだ、中国の市場は小さいのですが、近隣の国ということで交流がもたれるのでしょうか。前回のオランダと比較し日本の出展は頼もしく思えました。

展示会場では、中国が生馬鈴薯の輸入を制限している関係（実質輸入禁止）で会場内への海外（欧米）からの生馬鈴薯の展示は少なく、パネルなどが大変多く、興味を削がれました。前回と比べてこの点は残念です。けれども、中国側の展示では、かなり多くの品種展示がありました。また、ミニチューバー（？）の展示も盛んで意気込みを感じました。雲南師範大学からのカラーポテトチップの展示では、当社商品よりも鮮やかな色のポテトチップが展示されているのが印象的でした。中国では多くの農業従事者の方々による品種改良が盛んな様子が伺えました。

また、雲南省昆明という土地柄より、少数民族の衣装に身を包んだコンパニオンの女性が大変目立ちました。

ポテトチップの展示では、中国2社の展示がありました。推測ですが、昆明市内または、近隣で作られた製品と思えます。チップ原料としては、

基本的に原料の安定性が大事であり、展示の製品がよいことから、原料馬鈴薯の品質もかなりよいと思えました。この2週間ほど前に上海に行きましたが、上海と比べてもよい製品でした。



この日の食事は、朝はホテル、昼は展示会場、夜はホテル近くの湖畔の素敵なレストランです。

朝食では、黄色みの強い、フレンチフライを食べました。私の印象では、中国製のように感じられました。味が気になり食べましたが、表現のしようがないのですが、ごく普通の味でした。食感的には、でんぷん価14くらいかな(?)。

また、夕食で、芋餅と通訳が表現していたのですが、日本の芋餅ではなく、食感的には、ハッシュドポテト(ハッシュドブラウニー)のような感じで、やや水分の多い芋のような感じでした。食べた瞬間に「ハッシュドポテトだ!」と思わず昆明で食べられたことに感激してしまいました。

この日の夕食は、しっかり美味しく食べました。

3月27日。本来、3月30日の企画である陸良県の馬鈴薯畑に行きました。前日に聞いたところ、3時間ほどで行けるとのこと、タクシーをチャーターして行きました。

昆明から途中の石林近郊までは、石林が世界的に有名な観光地ということもあり快適な高速道路を1時間半ほど走って行きました。

車窓から見える景色は、赤い土とひ弱な土地に見えました。石林近くにさしかかると、一面カルスト台地、岩岩岩。こんなところでどうやってじゃがいもを作るのだろうと思いながら、果てしなく走り続けました。石林近郊から陸良県まで、今度は舗装はされているけれどもアップダウンの激しい道となりました。頭を何度も車の天井にぶつけながら、全身シェイク状態でした。1時間半ほど走ったでしょうか。陸良県の中心部に着いたようでした。

そこからは、通訳と携帯電話を駆使し、無事目的地に着きました。現地は、一面、平地で空豆畑が大規模に作られ、また、稲作地帯のように見えました。

今度行くときには、高速道路ができていでしょう。道中、道路のために石を砕く人々、道の障害になる家を壊す人々、など多くの人を見かけました。一方、ゆっくりと走る牛車もあり、ゆっくり走る貨物車もあり、疾走する高級車もあり、でした。

馬鈴薯畑は、パトカー先導でVIP扱いでした。けれど、車からは降りないようにとの条件付きです。

私の雲南省の畑のイメージは、ガイドブックから得られる段々畑に作物が植えられている風景です。馬鈴薯大会のパンフレットも初めはそうでした。途中の高速道路から見られる畑はガイドブック通りでしたし、目的地近くの民家付近の家庭菜園では、日本のように小さく作られていました。目的地に次第に近づくと、景色は変わってきました。

いつしか、一面が空豆一色の畑が現れていました。

目的地でまず初めに目に入ったじゃがいも畑は、桑の木の間に植えられたじゃがいもです。以前見たパンフレットは、トウモロコシの間にじゃがいもが植えられていました。おもしろい植え方をするものだと思っていましたが、実際に自分の目で見るとやはり違和感があります。

などと思いつつカメラで撮り続けました。



突然、一面じゃがいも一色の畑が現れてきました。表現のしようがないのですが、アイダホの畑が、飛行機から見て大きいなと感じましたが、それよりも遙かに大きな畑でした。中国人のやることは、とにかく大きいことにいつも驚かされますが、とにかくデカイ！ 通訳の話では、全体で660平方メートル×1万の面積があると言っていました。素人なので表現のしようがありません。中国都市部で小さな畑を見慣れていたので、全くイメージが変わりました。ただよく見ると、畦道がコンクリートで造られ、多分時期が変われば、一面水田になるのではと想像しました。

おぼろげな私の知識で恥ずかしいのですが、雲南省のGDPは、上海の10分の1、日本の100分の1とのイメージが崩れました。中国全土に高速道路網など流通が進歩すれば、アイダホのような世界一の畑作地帯になるのではないのでしょうか。車を停車することができなかったのでピンぼけ写真しか撮れなくて大変残念でした。

朝7時に出発して、じゃがいも畑を見終わったのは、昼近くでした。

昼食後、石林を観光し、無事ホテルに帰り着きました。

この日は、石林近郊で地元の田舎料理とホテル近くの湖畔の大衆料理店で夕食を取りました。

食べたじゃがいもは、夕食に単三電池位のじゃがいもコロッケです。でんぷんは、やや低めに感じましたが、全く遜色ないものでした。

その後、お酒に誘われ、目に止まったフレンチフライを頼みましたら、米国産と思われるものが出てきました。マクドナルドのものよりちょっと小さめのものでした。朝食で食べた中国産と思われるものの方が遙かにおいしかったです。

3月28日。午前中、民族村、龍門の観光後、市場などに行ってみました。

昆明市内近郊の市場ということでした。じゃがいもが地面に直接、5トン、10トン程度の山になって野積みされていました。上には、貨物車のシートに使うような物が遮光のためかけてあり、シートがめくれるのを防止するように藁製の重しなどが乗っていました。これを人手で選別し、30kgほどのネットの袋に入れていました。昆明で見かけるじゃがいもは、全て同じようにネット袋に梱包されていました。一見雑な保管のように思えますが、遮光をし、シートや藁などで保温もでき、じゃがいもにとっては、快適に保管されていました。選別された不良品

はどうなるのかわかりませんが、廃棄などされず、きちんと消費されているのではないかと思います。芽は、まだ5mm程度で、動き始めたころのようです。どこかで貯蔵されたものをトラックで市場に野積みし、ここで袋詰めのだ取りなのでしょう。のどかな風景でした。



その後、ウォルマートに行きました。昆明には数軒あるようです。不思議なことに、さつまいもは売っていたのですが、じゃがいもは売っていませんでした。ポテトチップ売り場はまだわずかですが、小さな子どもが買っていました。まだまだ値段が高いために手が出ないようです。

3月29日。ハードスケジュールでついに通訳のC女史はダウン。

この日は、市内から1時間半程度の馬鈴薯品種展示園に行きました。

着くとすぐ、歓迎のために多くの若者が民族衣装に身を包み、楽器をならし、踊りを踊り歓迎してくれました。近隣の子どもたちも何が始まったか興味津々に集まってきていました。



かなりの敷地に多品種があるようですが、残念ながら、私にはよくわかりません。ただ、ウイルスに罹患しているような馬鈴薯は、抜き取りの必要を感じたのですが、展示のためか、そのままにされているようで不思議でした。27日に見た馬鈴薯畑と比べ、そのギャップがよく理解できませんでした。

この夜は、最後の晩餐会となりました。私たち日本人グループのために、舞台すぐ脇のテーブルをご用意いただきました。目の前の民族衣装に身を包んだ若者に、一時旅の疲れを忘れていました。

次は、2006.8.20-26にアイダホで行われます。次回もぜひ参加したいものと思っています。

少ない中国体験ですが、昆明では、他の地域よりもじゃがいもの料理が多いように思えました。観光地では、さつまいもやじゃがいもの焼き芋があり、じゃがいもの串刺しの天ぷらもありました。また、ぜひ訪れたい町となりました。

岩井さんの参加報告で、記述にご配慮頂いた「馬鈴薯育種家のM氏」は私です。ここでは岩井さんとの重複を避け、岩井さんの補足とM氏から見た雲南昆明での情勢について記述します。

（会議の全体概要とM氏の憂鬱）

世界馬鈴薯会議（World Potato Congress）は3年に1回開催され、研究開発の現状と方向性について世界的な視点から議論を進めると同時に、生産や加工・販売に関わるばれいしょ産業の情報交換・商談の場となっています。当初の予定では2003年4月の開催であったがSARSの発生により、ほぼ1年遅れの開催となりました。開催地の雲南省昆明市は、標高1,891mの亜熱帯高地に位置し、年平均気温は15前後と温暖な気候を利用した花卉の栽培が盛んであり、ばれいしょの作型は日本の冬作および春作に相当する春から夏収穫が主流です。大会参加者は39ヶ国、1,100名以上であり、中国国内の19の省、市、地区が共同参加しています。日本からはカルビーおよびキリンビールがブースを出展し、この他は、カルビーポテト、ジャパンプテト、長崎県種馬鈴薯協会、ノーザンファーム、湖池屋、菊水堂、和田製糖、東京家政学院短大などからの一般参加でした。2000年9月のオランダ大会と同様に、日本の参加者は一部の研究者を除いて加工・販売側の参加者ばかりでした。生産側は長崎県種馬鈴薯協会を例外として皆無であり、世界1位のばれいしょ生産量を誇る中国の動向を自らの目で確認して欲しかった。ヨーロッパや北米、オセアニアのばれいしょ先進国が、中国においてどのような経済行為を展開しようとしているか観察する良い機会であり、日本への輸出アプローチに関し重要な情報が得られるのにと考えると、日本のばれいしょ生産の将来に憂鬱を感じました。

（品種と種いもなど）

1995年に北京で中日甘藷馬鈴薯シンポジウムが開催され、北京農科大学とホテルの往復を1週間ほどしました。この時の論文発表や展示の状況に比べ、中国の品種改良の能力や種いも生産の無病性管理・増殖技術は確実に向上していると観察しました。

ばれいしょの生産量が多い省には馬鈴薯研究所、少なくとも農業試験場に馬鈴薯研究部があり、かなりの研究・技術スタッフがいます。これに加え、大学においても品種改良を手がけている様子でした。国際貿易センターの展示場および昆明市郊外の品種展示圃にある品種は、外国企業の導入品種、外国との共同研究による共同育成品種、中国独自の育成品種など、実に多くの品種がありました。展示圃の品種をぐるっと見回すと、植物体の草型からヨーロッパの小葉タイプ、北アメリカの広葉タイプ、国際ばれいしょセンター（CIP）のアンディゲナタイプなど、かなり幅広い多様性がありました。



品種展示圃の様子

昆明市西山区團結村にて

面白いのは、葉巻症状やモザイク症状の出た株がそのまま栽植展示してあり、また中国北部地域の内モンゴル自治区の品種などは雲南の低緯度短日条件に反応して早生化して草丈が縮ん

でいるなど、出展者の意図が反映されていない標本展示も見受けられました。

また展示圃近くの一般ばれいしょ圃場の管理は良い状態ではなく、展示場ブースで見せられた進んだ技術が現場に本当に届いているのかとの疑問も持ちました。一方、岩井さんの報告にある陸良の大規模馬鈴薯圃場への途上で見かけた農家自家菜園では、ウイルス罹病株を見ませんでした。日本も同じですが自家菜園ばれいしょを見れば、その地域のウイルス汚染度が推測でき、罹病株を見なかったのは驚きでした。研究者のH氏によれば、ウイルス病を媒介するアブラムシは飛行能力が極端に低いため気圧の低い高地での発生は極めて少ないとのこと、なるほどH氏の高度計付き腕時計の示す標高は標高 1,800 ~ 1,850m を示してました。それにしても、前作で栽培した元種いもが無病でなければウイルス病が出るはずであり、地域によってはかなりレベルの高い種いもを使用していると推察します。



品種展示圃にあった葉巻症状
昆明市西山区團結村にて



品種展示圃の外にあった畑
昆明市西山区團結村にて



ばれいしょと桑の間作
曲靖市陸良県三盆河地区

展示で示された種いもの増殖システムは、日本の「原々種 - 原種 - 採種」のような単一ではなく、無菌器内増殖によるマイクロチューバー、土耕や水耕によるミニチューバー、無菌苗の挿し木増殖など様々な手法を用いて元種いもの増殖を行っており、多くは外国との技術提携により体系を組み立てていました。ブースの担当に聞くと、圃場での増殖は1 ~ 2作とのこと。白紙に近い状況での技術展開は、過去のしがらみや負の遺産もないので、導入元となる本国に比べより理想的な形で体系が組まれることが多いと感じました。一方で、圃場で増殖を繰り返すだけの無病性管理が出来ないので、とも思いました。確認してませんが賃金格差も背景にあり、日本では採算が合わなくとも中国では労賃が安いためにマイクロチューバーや挿し木増殖で採算が合うのかもしれませんが。



マイクロチューバー
展示場、中国外国合弁企業ブース

(ブーメラン効果とM氏の嘆き)

雲南師範大学などでは、C I P から導入した遺伝資源を利用してアントシアニン含有のカラ

フルポテトを育成し、ポテトチップ試作品（カラフルチップの試作品については2ページ参照）や機能性研究を展示していました。

実用形質や色素集積の改良は、日本で育成した紫肉のインカパープルに匹敵するレベルであり、大変興味を引かれました。しかし「ばれいしょ」について、「コメ（稲）」のように絶対輸入しないぞという確固たる対応が日本にないので、外国と積極的に共同研究を推進するようにとの研究行政の基本方針にそのまま従うわけには行きません。日本の品種が外国で生産され日本へ輸入されるブーメラン現象のように直接の利害関係が生じる育種分野においては、日本への農産物輸出が想定される国との研究協力のあり方について作物ごとに方針が示されない限り、積極的な接触を躊躇せざる終えません。展示物を眺めていると中国の研究者から何件か問い合わせを受け、地元の新聞記者に捕まって質問を受けましたが、一般的な情報交換までの対応としました。まさか私がカラフルポテトを日本で育成していると相手は知るよしもなく、この状況は心苦しく何か後ろめたさを感じるものでした。

（庶民はばれいしょを食べている？）

知人から、故周恩来首相の雲南訪問に関する新聞記事を見せられました。首相が農民に「何を食べてますか？」と聞くと「ばれいしょ」と答えました。昨日の夕食は？、お昼は？・・・ここ2週間ほど、ずっとばれいしょしか食べていない様子です。南米アンデスのインディオでもあるまいし、雲南の農民がばれいしょを主食にしているとは信じられず、ずっと疑問を持ってました。今回は、農民に話を聞く機会はありませんでしたが、陸良までのタクシー運転手に話を聞くと、ばれいしょ（土豆、トーマーと発音）はよく食べ、今朝も食べた。そしてばれいしょだけを扱う市場に案内され、約50kg詰めと同じ規格の袋に詰めた土豆が運ばれるのをよく見かけました。地域と季節によっては、主食の地位を占めても不思議でないようです。

春雨の化け物のような麺状の乾物を、展示でも店先でも見かけます。ばれいしょ澱粉を原料としており、実際の料理を食べる機会に恵まれませんでした。重要な食品の様子でした。また、澱粉ではなくいもをそのまま乾燥させて粉にしたいいわゆる乾燥全粒粉も、よく見かけましたが料理法は判りませんでした。



澱粉から作った麺 澱粉

もう少し腰を落ち着けてレストランではなく食堂で食事をすれば、「ばれいしょの食文化」を知ることが出来たのですが、今回は時間的にもお腹の丈夫さからも無理でした。しかし、日本よりしっかりした「ばれいしょの食文化」があるとの印象は受けました。

（暮らしで見たこと）

10年前に一度だけ北京を見ており、これと現在の昆明の比較ですが、町の様子やかいま見る住民の暮らしぶりは経済状況が向上しており、中国は確実に経済成長していると感じました。一方で昆明から北西へ130kmほど離れた曲靖近郊では、舗装してない砂利道を水牛が荷車を引く一見のどかな農村風景が広がり、農民の住居は村を囲む塀の中に家畜小屋と混在するブロック作りでした。このような陸良のばれいしょ栽培地に向かう途中に見られた村の状況などを

見ると、都市部と農村部の貧富格差はかなりあると思え、農村部でも品種の展示が行われていた昆明市西山区團結村には「万元戸」と思われるような立派な家があり、地域や職業による貧富の差がかなり進行しているように見られました。自家用車を持ち、日本円で1,500万円を超える住宅を購入できる都市部の人間と、年間所得が1万円にも満たない農村部の人を見ると、海外にどんどん進出する発展著しい中国の影の部分を見たような気がしました。中国の平均所得から考えると維持コストが高価なはずの携帯電話の普及はめざましく、携帯電話所有の有無で富者階級とその他階級に分けられるのではないかと観察しました。



お金持ちの農家（万元戸？）
昆明市西山区團結村にて

余談ですが、食堂やレストランで虻や蚊などの衛生害虫が非常に少ないことがかえって不思議でした。池や水たまり、生け垣や草むらがあり年中温暖だというのに、虫だけでなく鳥も小動物も見かけない。市内の至る所の樹木に、地上部より1m程のところまで白い薬剤風の物質が塗布されているのを見かけました。研究者のH氏によれば、その物質は特有の臭気を有せず、薬剤とすれば有機リン系や有機塩素系ではないように思える。おそらく除虫菊成分に近いピレスロイド系の薬剤ではと。中国から日本へ輸入した野菜に基準を超える残留農薬があることなどから類推すると、食べ物から生活環境まですべてが農薬漬けではないかとちょっと恐ろしいような気もしました。

（アメリカのささやき）

今回はアイダホ州ボイジ市で2006年8月の開催予定であり、アメリカポテト協会の主催するレセプションに参加しました。同協会会長のJames Tiede氏と話をする機会があり、「遺伝資源の導入はどの様にしている」と質問を受けました。つまり遺伝資源は外国の品種を入手するので、「生いも」を日本へ持ち込むことになる。そこで植物防疫法により禁止されている「日本への生いも輸出」をするために、同様な方法をとれば上手くすり抜ける道があるのではと探していました。日本へ生いもを持ち込むためには、農林水産大臣の特別許可が必要で、植物防疫所の隔離温室で栽培して無病性を確認し、日本へ持ち込んでから約1年後に数個の種いもを手にすることが出来る。しかし大変に手間と時間がかかるので、求める遺伝形質を有する種子を導入してこれを播種して選抜することが多いと説明しました。正直に生いもの輸入に抜け道がないか質問するところが、またアメリカ人らしいところです。お互いに中国では何かしら秘密のバールでストレスを感じており、これをふまえて「正しい現状の認識が何事にも必要なので、北海道十勝まで来るなら私が産地を案内する」と話しました。来訪を受ければ、多少の虚構をもって適切に案内するつもりです。

本会議は、直接経済行為につながる育種事業にとって重要な情報が得られる機会であり、2年先に向けて時間とお金の準備を進め次回も是非参加したいと考えています。

第2回国際サツマイモ・キャッサバシンポジウムのお知らせ

独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構
作物研究所畑作物研究部甘しょ育種研究室 中谷 誠

2005年6月14日～17日の日程で、マレーシアのクアラルンプールにおいて「第2回国際サツマイモ・キャッサバシンポジウム」が開催されます（主催：国際園芸学会とマレーシア農業開発研究所（MARDI））。

今回のメインテーマは「商品化に向けた技術革新（Innovative Technologies for Commercialization）」ということで、通常の研究発表に加えて、企業等の製品・試作品等の出展も募集していますので、JRT 会員各位におかれましても、是非、参加や出展をご検討下さい。

因みに第一回は、一昨年ペルーの首都リマで開催されました。

なお、私（甘しょ育種研究室・中谷）がこのシンポジウムの日本の連絡員を仰せつかっておりますので、参加希望の方には、お手伝いをさせていただきます。

詳しくは、MARDI の HP から情報をご覧ください。

<http://www.mardi.my/main.php?Content=vertsections&VertSectionID=26>

また、第2回国際サツマイモ・キャッサバシンポジウムの内容は下記のとおり（英文）です。
2nd International Symposium on Sweetpotato and Cassava

7 June 2004

Dear Friends,

It is my pleasure to inform you that MARDI (Malaysian Agricultural Research & Development Institute) together with ISHS (International Society for Horticultural Science) is organizing the above symposium next year from 14-17 June in Kuala Lumpur, Malaysia.

I would like to cordially invite you and your colleagues to participate in this not-to-be missed symposium. Remember that Asia is the home of the world's largest exporter of cassava products, namely Thailand, and also boasts of the world's largest production areas in sweetpotato, namely China, Indonesia and Vietnam.

You can access information on the symposium at:

<http://www.mardi.my/main.php?Content=vertsections&VertSectionID=26>

Alternatively, you can access the same through MARDI 's homepage: www.mardi.my

Please follow these steps:

1. On the top horizontal bar, click on: “ Conferences & Exhibitions ”

2. Scroll down to “ Conferences & Exhibitions 2005 ”
3. Click on: “ 2nd International Symposium on Sweetpotato & Cassava ” .
4. Click on “ Registration Form ” to download the same

You may wish to participate by contributing an oral paper or a poster. Your institute or company may also wish to rent an exhibition booth to display your products and services. We would very much like to encourage private sector participation as the theme of the Symposium is: “ INNOVATIVE TECHNOLOGIES FOR COMMERCIALIZATION ”

Relevant companies in the private sector, dealing with either sweetpotato or cassava, may wish to participate in the symposium, in any of the following forms:

1. Present an oral paper
2. Present a poster paper
3. Put up a display booth for the exhibition
4. Help sponsor speakers
5. Help sponsor a satellite meeting (see Symposium announcement on-line as given above, to get an idea of some suggested satellite meetings).

If you know of such companies, please pass on this information to them.

Looking forward to hearing from you.

Best regards,

Tan Swee Lian, PhD, KMN
Chairperson, ISHS Working Group on Cassava
Chairperson, Technical Advisory Committee, 2ISSC
Rice & Industrial Crops Research Centre
MARDI
P.O. Box 12301
50774 Kuala Lumpur
Malaysia
Tel: 603-8943 7516
Fax: 603-8942 5786
e-mail: slt@mardi.m

「馬鈴しょそうか病に関する国際シンポジウム」のご案内
INTERNATIONAL POTATO SCAB SYMPOSIUM (IPSS 2004)
ホームページ <http://www.knt.co.jp/ec/ipss/index.html>

独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構

北海道農業研究センター畑作研究部ばれいしょ育種研究室 森 元幸

(ご挨拶)

馬鈴しょは、北海道の畑作を支える基幹作物ですが、そうか病は馬鈴しょの高品質持続生産を推進するうえでの大きな阻害要因となっていることは周知のとおりです。澱粉原料用では澱粉の含量・質の低下を招き、食用・加工用としてはその病斑のため品質を著しく損なうことになり、その恒久的な防除対策が望まれています。

このような事情は北海道だけではなく、日本各地をはじめ、アジア、北米、欧州など、ほとんどの馬鈴しょ栽培地域で同様な実態であり、各地域で対応に苦慮しているのが実情です。

そのような中、近年、日本はもちろん、世界中の研究機関、大学で精力的にそうか病菌の生態、細菌学的研究、そうか病の診断法、防除法について研究が行われ、様々な重要な知見、実際の栽培現場に応用できる技術が徐々に蓄積されつつあります。このような状況におきまして先端的な研究者が一堂に会し、その貴重な成果を交換することは、日本のみならず、世界的な馬鈴しょ栽培・生産に大いに貢献するものと考えます。

以上のような趣旨のもと、平成16年9月6日(月)7日(火)の2日間、内外の研究者を招聘し、「馬鈴しょのそうか病に関する国際シンポジウム」(略称 IPSS 2004)を札幌市において開催したいと存じますので、多数の方の参加をお待ちしております。

馬鈴しょそうか病に関する国際シンポジウム 組織委員会委員長

北海道大学大学院 農学研究科教授 内藤繁男

(プログラム)

テーマ：馬鈴しょそうか病対策へ向けた新たな研究アプローチ

9月6日(月)

開会 1:00 pm

1:30 pm - 3:30 pm “そうか病菌の病原性と同定”

1. 馬鈴しょそうか病研究の概観と病原性の進化

Dr. Rosemary Loria Cornell University

2. そうか病菌を含むストレプトマイセス属菌が生産する毒素とその応用

夏目雅裕 氏 東京農工大学

3. そうか病菌の分離同定および定量

田中文夫 氏 北海道立中央農業試験場

3:45 pm - 4:45 pm “ 抵抗性品種の育種 ”

4. 北欧諸国におけるそうか病

Dr. Jari P. T. Valkonen University of Helsinki

5. カナダ（北米）におけるそうか病

Dr. Richard Tarn Potato Research Centre, Agriculture and Agri-Food Canada

6:00 pm - 8:00 pm 懇親会

9月7日（火）

9:30 am - 11:30 am “ 抵抗性品種の育種 ”

6. インドにおけるそうか病：抵抗性品種のスクリーニング

Dr. J. S. Srivastava Banaras Hindu University

7. 韓国におけるそうか病

Dr. Chunken Lim Kangwon National University

8. 日本における抵抗性品種開発：抵抗性母本とスクリーニング技術の包括的情報

小林 晃氏 北海道農業研究センター畑作部

1:00 pm - 3:30 pm “ 防除 ”

9. 病害抑制効果を持つ *Streptomyces* による生物学的防除

Dr. Daqun Liu Heibei University

10. オーストラリアにおけるそうか病と総合防除

Dr. Calum Wilson Tasmanian Institute of Agricultural Research

11. 土壌環境制御によるそうか病防除対策

志賀弘行氏 北海道立中央農業試験場

12. 発生程度に応じた総合防除

田中民夫氏 北海道立中央農業試験場

（同時開催）

ポスターセッション

パネル展示

* ホームページ（<http://www.knt.co.jp/ec/ipss/index.html>）申し込み締め切り（8月6日）後の問い合わせ先

（社）北海道馬鈴しょ生産安定基金協会

電話 011 - 232 - 6560

ファクス 011 - 222 - 1794

〒060-0004 札幌市中央区北14条西1丁目1番地 北農ビル18階